

証言

写真をめぐる人々との対応 —父・麻生徹男資料の管理者としての30年—

天児 都 (産婦人科医)

私の父、麻生徹男は1937年撮影の慰安婦関係の写真資料10点と論文1篇を書き残し、1989年(平成元年)7月11日に亡くなりました。

実は亡くなる前の父と、次のような会話を交わしたことがありました。1986年(昭和61年)は売春防止法制定30周年に当り、この時、県婦人問題懇話会の委員をしていた私は、売春に関わりのある保護司や警察関係者などに、祖父の駆梅院関係資料と父の慰安婦関係資料をもとにして講演をしました。

そのとき私は初めて慰安婦の資料を読み、千田夏光氏が非常に誤まったことを書いているのを知りました。そこで父に、「お父さんが本当のことを書いて発表したらどうですか」と言いました。すると父は、「私は当事者なので批評をするのは別の人だ。私は自分の行ったことおこなを書いて置く」と言いました。

ところが、本稿で書くように、正しく批評する人は現われず、誤りが拡大され、強制連行が声高に唱えられて行きました。

父の死後、約30年間、私は父の資料の管理者として多くの経験をしてきました。30年の期間を大きく3つに分け、対応した人々、マスコミ関係のTVや新聞、出版社、作家、研究者、政治家などの対応について話します。

1. 1989年(平成元年)10月より1996年(平成8年)まで

'89年7月11日に父が亡くなって、仏式の忌明けが過ぎるとすぐに10月19日、ルポルタージュ作家の林えいだいが、自分は父の知人の上坪隆氏の友人であると名乗って、1人住まいをしていた母を訪ねてきました。彼は慰安婦の写真帖を見て写真の複写を行い、母に関連資料を父の書斎にとりに行かせた間に、5枚の写真を剥ぎ取り、無断で持ち帰りました。

実は、父は戦争の中の女性達を撮影した写真をまとめて、『戦線女人考』と題する写真集として友人の出版社で作っている途中で亡くなってしまったので、私が父の死の1年目に仕上げて友人達に差し上げました。そのあとがきに父は、「これは私の著作権の宣言だ」と書いていました。ところが、父のその思いは裏切られてしまいました。林えいだいが母を訪れた帰途、この出版社に寄り、未製本の写真集1冊分を持ち出していたのです。

私は林が母を訪ねた日の午後、母のところを訪ねて話を聞きましたが、腑に落ちなかったのは、昼12時近く迄滞在して、そそくさと帰って行ったということでした。母はとてももてなし上手の人なので、昼時迄いたら、必ず食事を振る舞うはずだからです。何かやましいことがあったのではなかろうかと写真帖を開き、写真を盗まれていることを発見しま

した。その夜、私は林に電話で、今日持って行ったものは一旦全部返却してもらいたい、そしてあらためて話をしたい、と伝えました。数日後に感光した35ミリフィルム2枚と未製本の写真と紙のコピー2枚が送られてきただけだったので、品物を特定して返却するよう、内容証明付きの手紙を弁護士に書いてもらって送りました。

相手から「自分を盗人扱いする。名誉毀損で訴える。」という手紙が来ました。弁護士に対応を相談すると、「彼は盗んだ品を持っているので法廷には出て来れません。その品を使うことは出来ません」と言われました。

林えいはいは父の生前に、『清算されない昭和一朝鮮人強制連行の記録（グラフィック・レポート）』という写真集を岩波書店から出版していました。強制連行という言葉は、1965年に朴慶植著『朝鮮人強制連行の記録』（未来社）で徴用（国家が国民を呼び出して働かせること）の朝鮮人を強制連行でくくって使ったのがはじめて、8年後の1973年千田夏光著『従軍慰安婦―“声なき女”八万人の告発』では、女性が強制連行されて慰安婦にされたこととなり、林えいはいや吉田清治らが本を出しました。

林えいはいの本の写真は、いろんな人々の写真を盗っていて、人々が抗議しても本人が相手にしなかったので、出版されると人々が出版社に訴えてきたそうです。

鈴木裕子著岩波ブックレット『朝鮮人従軍慰安婦』に、父の写真の無断使用と説明の誤りがあり、指摘すると、事後承諾のサインを求められたので、私はそれを拒否してもっと上の人、社長と話がしたいと伝えました。すると代表取締役の若手の人が訪ねられて、話し合いの機会を得ました。この方は私の話をよく聞かれ、「あなたの話は話の流れとして理解できる。しかし私は・・・」と言って左翼の考えを披露されました。私の考えを理解してもらうには少し時間が必要だと思うので、鈴木氏の文章の問題点を書いて送り、2、3度手紙のやり取りをして、ある程度理解してもらいました。

また岩波は林えいはいが出版した所だったので、こちらから写真が出たものかどうか調べましたが、それはありませんでした。

林えいはいが母の所を訪ねて来たその数日後に、不二出版の舟橋治氏が訪ねてこられました。父が生前に写真と論文の資料を彼に送っていて、「十五年戦争重要文献シリーズ」の『軍医官の戦場報告意見集』を、不二出版より'90年2月20日に出版しました。この中には、他に2篇の論文が入っています。大切なことは、1940年代に書かれた論文はこの3篇だということ覚えていてください。あとは30年以上経って、千田夏光氏が父を取材して書いたという小説『従軍慰安婦』が事実を述べた資料と誤解され、'90年代に本を出した人達がマゴ引きして、誤りを拡大してしまいました。

もう一度、慰安婦に関するニュースの経過を見て見ます。

'91年11月28日にNHK・ニュース21特集で、父の撮影写真3枚が放映されました。

'91年12月6日に東京地裁に「強制連行の補償」を求め、朝鮮人慰安婦らが提訴したことを報ずるためでした。（日本は1965年に締結した日韓条約及び諸協定で、戦時中の問題は解決しているので、敗訴となっています。）

'92・1・16 宮沢首相訪韓。韓国で慰安婦問題で8回も謝罪しました。その直前の朝日新聞で、吉見義明氏が慰安婦の軍閥与資料発見と報じられたものは、「軍の関与がない」ことを周知するために出したもので、一般に知られていたものを外国から帰って間もない本人が知らなかったのを、朝日は訂正せずに掲載したものでした。

「女たちの戦争と平和資料館」'05年設立(wam)館長・西野留美子氏は、'92年『従軍慰安婦一元兵士たちの証言』を明石書店より出版しましたが、その表紙に父の写真が無断使用されていたので連絡すると、「写真を材料にコラージュの手法を用いた表紙を作る時には、許可は要らないというのが当社の取り決め」と言ったので、日本写真家協会の細江英公氏にご教示を受けて、「著作権法は公表後50年の保護だが、著作者の財産権が期限が切れるだけで人格権はそのまま残るので、明石書店の表紙のコラージュ問題は天児に著作権がある」と、先方に伝えました。その後先方からの応答はありませんでした。(写真の著作権は、平成8年に著作者の死後50年に改められました。)

本を出版する人達は、出版社の人を通して写真使用許可を求めて来ました。強制連行の証拠写真として使用を求められました。主なところは岩波書店、明石書店、三一書房、大月書店、かもがわ出版などでした。

雑誌社は、集英社『パート』、『週刊現代』、『週刊フラッシュ』、『毎日グラフ』、『アエラ』など、

新聞社は朝日、毎日、日経、西日本(東京、中日など)、京都新聞、アカハタ、社会党の「壁新聞」、東京学生新聞など。

これらの写真使用許可を求めて来た人達が、「この問題が日本が残した戦後処理の最後のものである。政府に謝罪を要求して1日も早く補償しなければならない」と、ほとんどの人が同じ科白を繰り返しました。そこである時から、「日本は日韓条約を締結し、5億ドルの賠償を払っているのに、もう税金からは無理と思いますが、あなたは自分のポケットマネーから支払いますか」と聞いてみたら、ほとんどすべての人が「政府が出すべきだ、湾岸戦争にあんなに多額のお金を出すではないか」と言われ、その発信場所も解りました。

取材に来たTV会社と、慰安婦の画像を放映した所を述べます。

※NHK ETV特集・従軍慰安婦(1)'95・8・2 (2)'95・8・3(※これはひどい番組で左翼の宣伝です。NHKはこれを海外にも出していると云われています。)

その前にNHKが衛星放送を始めて間もなく

・NHK・BS7「世界が伝える日本」の題で、「太平洋戦争の魂」'91年8月21日(再)9月23日、8月24日(再)、8月24日

韓国のテレビ局KBSが製作した、父の写真数枚を無断使用した番組を放映。

- ・日本テレビより「アリランの歌」放映。
- ・ドイツテレビより10分位放映。3枚使用(コンドームとチマチョゴリの2枚分は断わる)
- ・BBCより「日本の戦争責任」2枚(規定、楊家宅慰安所)
- ・韓国テレビ(KBS、MBS、SBS)

'92・6・27 東京担当コーディネーター^{ホンストク}洪秀徳氏が、李東碩氏とカメラマンを連れて入って来て取材されました。西日本新聞(東京新聞)に書いた「慰安婦の資料」の文を読んで来られたので、父の撮った写真の『戦線女人考』を見ながら話をしました。民族の恨みを晴らすとか、慰安所を作った責任者処罰などが声高に語られていた時に、写真に即して互に通ずるものがあり、理解が進んだと思いました。その日の取材で「8月15日特集一ソウル・福岡・沖縄・グアム」を作り、台本指導は千田夏光でした。取材した記者に、放映前に私に見せて下さいと言ったのを守ってくれました(※このビデオを日本の中高の教材に輸入したいと言った業者に、私は慰安婦の事実を説明して、中止するよう申し

ました。)

取材に来た韓国人たちのことを政府の人達に伝えて、悪化している日韓のことを何とかしたいと、'92年6月30日に私の選挙区で副総裁と言われていた山崎拓氏へ手紙を出しました。選挙の時にもらった名刺の事務所宛でしたが、数日後に「宛先に届きませんでした」と返されて来ました。驚いて知人に尋ねると、選挙の時だけ賑やかな場所を事務所に借りて、それが終わると全く無関係ということだったらしく、人気が無い人だと言われ、他の政治家を紹介して下さったのですが、政府に迄は届きませんでした。

韓国との誤った関係は、二次的な被害を起こしてきました。'92年7月22日に福岡キリスト教センターを売却して北九州に建てる建物の資金にせよと、北九州の韓国人達による要望が出されたのです。その建物には、林えいだいの資料展示室も含まれていました。私はセンターの理事の一人一人を訪ね、慰安婦問題が何であるかを説明して誤った判断をしようとしている善人達を止めました。

'93年に入ると、2月2日に香港の英語週刊誌 *Far East Economic Review* の特派員ルザリオ氏が、日本の戦争の特集を組む予定で『バート』を見て連絡して来ました。私は歴史の資料として発表しているので、その様に扱って欲しいと言いました。自分は日本の歴史を知らないので教えてと言うので、世界史の中の植民地政策の歴史を述べて、明治維新ころからのことを、日本の外交史の立場で話しました。先方はもう一度スタッフの人たちと話し合い、電話するということになりました。(この時は一時掲載は止めましたが、一年後ぐらいに掲載したと聞きました。)

『アエラ』の写真無断使用では、それを指摘した時に「私たちは写真の使用料をちゃんと払っている」と言われ、調べてみると「日本の戦後責任をハッキリさせる会」代表の白杵敬子という人が、私が完成させた百冊の父の写真集の一つを新聞社に提供してお金をもらっていました。私は「そのお金を返してもらいたい。母の方に支払って下さい。そして謝罪して下さい。」と伝えたところ、謝罪文を書きましたが、その文中に「天児が言うから…を書く」という言葉が二ヶ所に入っていました。以前に食品会社の異物混入の時にもらった謝罪文と似ていたので、こうした書式があるのだらうと思いました。白杵敬子の名は、ヒックスの『性の奴隷 従軍慰安婦』中の参考文献、韓国系米人ソーの論文の参考文献の中にも出て来ます。私は会ったことはありません。

ヒックスの『性の奴隷 従軍慰安婦』は、'96年4月のクマラスワミ報告書が国連人権委員会に出した時の証拠とした唯一の本です。オーストラリア人のヒックスは韓国人のライターと協力して書きました。英文原書 (*Comfort Woman, sex slaves of the Japanese Imperial Force*) には七ヶ所父のことが出ていて、上海の慰安所の設立者にされ、写真は韓国の新聞社提供とされ、父の写真が使われていました。私は国際弁護士の人に、写真の著作権侵害であるとの通告を二度、ヒックス宛に書いてもらいましたが、住いが定住でなくそれ以上追うと裁判となり、日弁連はあなたと主張が違うので自分は出来ない、といわれました。慰安婦問題が起こった'90年台初めから、私は強制連行はない、慰安婦は性奴隷でなく娼婦であり、ソ連崩壊で弱体化した組織を維持するために行っている運動だと言って来ましたが、'15年8月に朝日が報道の誤まりを認める迄、問題にされませんでした。著作権を主張すれば、誤った使用をしていた人は改めて声高に話をされないことを経験的に知り、出来る限り話をしたり、手紙を送って来ました。

しかし写真を出版社に預けている間に二度盗まれ、家に盗りに来たのを合わせ、三度盗難にあいました。韓国から責任者を追求するとして、父の替りに仕事場迄電話で追いかけて来られ、「民族の恨み」をぶつけられました。仲間と思っていたキリスト教団体のY W C Aや諸団体の人達に犯罪者扱いされました。その上、NHKや朝日TVの内容はますます誤解を与えるものとなって来たので、'93年2月から石風社の福元満治氏と『上海より上海へ』の出版の準備にかりました。雑誌の発言で中国から日本に非難が来て大臣が辞めさせられた時、私は驚いて雑誌を買いに行きましたら、まだ発売の何日も前でした。ゲラが盗まれていると思いました。そのため自分の手許で用心しながら出版を行うことにして、父の『戦線女人考』の写真と、エッセー「上海より上海へ」に資料（論文、日誌など）を含め、'93年9月に出版しました。この本の出版で、一つの区切りが着きました。

もう二点、この時期の大切なことを記します。

'93年8月21日にドイツ在住の池永記代美氏から、“Zwangsprostitution”（『強制的売春』）という56ページの冊子に慰安所の写真を使用したので、事後承諾するようにと、ベルリンより手紙と冊子が送られて来ました。この人は韓国人達と一緒に運動して、偽りの情報をドイツ人の間に広げ、丁度天皇・皇后の御訪欧のときに運動を行い、美智子皇后はその衝撃と旅の疲労から、失語症を患われてしまいました。私はその回復をお助けしたくて、『上海より上海へ』をお贈りしたいと思いました。この本には日赤の看護婦の活躍する写真が多く入っているのですが、日赤の総裁は代々皇后が務められていることを知って、日赤の総長に一冊開封で本を贈り、届けて頂くようお願いしましたが、皇后には届きませんでした。丁度「アジア女性基金」を日赤にやらせる話が出ていた時で、これに加わらぬという決定をするのに役立てられたようです。'96年3月7日、ドイツの韓国人グループの写真使用はお断りしました。

'93年12月1日。甬喜山精治氏と言われる柏市在住の上海居留民だった方が『上海より上海へ』に載せた写真を見て、上海の俯瞰撮影写真が他に無いか捜してくれ、と頼まれました。捜して数枚見付け、18日に送りました。氏は上海の中学に通っていて、引揚げの時に何にも持ち帰らなかったもので、写真はとても懐かしいと言われ、戦時中の航空写真は爆撃の成果を撮ったもので、黒煙があがってよく見えないが、精緻に撮られたこれらの写真はとても貴重です、と教えて下さいました。そして当時の上海居留民の名簿のコピーに、父のエッセイに出てくる人々にマークを付けて送って下さいました。素晴らしい資料の裏付けを頂きました。父は日誌や手紙、メモなどから年表を作って書いていましたので、その事実の証明を思い掛けなく頂いて、感謝にたえません。

2. 1994年(平成6)3月より2012年(平成24)まで

父の『上海より上海へ』を'93年に石風社から出版して、私は多くの善意の方々と知り合うことが出来るようになりました。それ迄の五年間に私の方に連絡して来た人達は、ほとんど日本を貶めるために資料を使い、公平な発言をしていたと思ったTVも態度を変えていました。

本は少し高い値段とと思っていましたが、福岡市で週間ベストセラーにもなり、東京の神保町の店に平積みで置かれていると知らせて下さる方があり、高島俊男氏（中国文学者・

毎日新聞)、森崎和江氏(作家・熊本日日新聞)、下川耿史氏(作家・ダ・カーポ)らの批評に助けられ、少しずつ理解する人が出て来ました。

'94年3月22日、板倉由明氏(南京戦史編集長)が訪ねられ、「南京戦の中でよく解らない山田支隊のことを、南京での伝聞として本に書かれているので、何か資料はないか探して欲しい」と言われました。この日から'99年に亡くなられる迄、私はこの方から歴史を教わり、多くの研究者の方々を紹介され、日本を大切に思っている人がいらっしゃることを知って心強く思いました。

'95年12月号『正論』に「従軍慰安婦と私」の発表の機会を与えられました。読者より、従軍慰安婦は作家千田夏光の造語で、「従軍」は軍属を表わす言葉なので、「慰安婦」というのが正しいと教わり、それ以来「慰安婦」と言っています。

'96年8月1日 東亜日報東京支社長裴仁^{ペインジユン}俊宛に、写真の無断使用に対する抗議の手紙を出しました。

その経緯を書くため、まず Gerge Hicks の *Comfort Woman* についての説明をします。ジョージ・ヒックス著・濱田徹訳『性の奴隷 従軍慰安婦』(三一書房、'95・10・15出版)は、表紙に上海の慰安所の宣伝文句の写真無断使用していました。この時読者から、奴隷には宣伝は必要ないでしょうと矛盾をつかれています。使用写真はすべて無断使用。もとになった本は、'95年2月 Allen & Unwin 社(濠出版)より出され、写真著作権者は Dong・A・Daily、'95年8月 W. W. Norton & Company(米出版)より出され、写真著作権者は Dong・A・Daily となっています。

これは東亜日報という韓国の新聞社であることを朝日記者に教わり、抗議の手紙を書いたのです。8月8日に電話で謝って来ました。そして日本軍に対する悪口を、嫌という程聞かされ、私は「あなたの正義と私の正義とは違うようです」と言って、話を終えました。

'96年10月26日、福岡女性学・女性史の会で慰安婦の話をし、討論をしました。会長が紀要に載せると言われ、原稿を出していましたが、載せられませんでした。現在の wam の代表者西野瑠美子は福岡出身で、この会のメンバーでした。会の当日には出て来ませんでした。編集委員の一人で、紀要掲載に反対したそうです。私の話の内容は、丁度その頃雑誌『諸君』に載っていた西岡力氏と同じことを語っていたので、西岡氏に話したら、当時氏が編集されていた『現代コリア』'97年7・8月号373号に掲載して下さいました。

私の住む福岡は、新聞はすべて朝日系で、雑誌に発表すると「間違っていないか」と注意され、編集者に本当のことを理解させないと発表できない状態が、今も続いています。

'97・7・29-31 ロンドン大の大学院生木村真喜氏来訪。慰安婦について研究される方なので、主に板倉氏にいただいた文献などを紹介して力一杯説明したつもりでしたが、左翼の論調を出ませんでした。

'98・12・28 花園大学より学生の訪問。こちらは引揚婦人の保護に関する私の論文を資料としてお渡ししましたが、論点が自国を非難するものになっていました。何人かの若い人達の話聞いていて、何か国家観が歪んでいると思い、原因を調べ始めました。

'98・7・14 ハル・ゴールド(Hal Gold、ニューヨーク出身作家・京都在住)氏は、京都の書店で父の『上海より上海へ』を見て、翻訳したいとのこと。9月17日、母麻生きくと会い、翻訳と出版社に提案することの許可を求められ、承諾しました。その後、アイリス・チャンの *The Rape of Nanking* がニューヨーク・タイムズのベストセラーリストに

掲載され、ワシントンポストなどが高く評価したため、出版がやりやすくなりました。そこで、'00年6月、息子・豊の卒業式の後N・Yに行って、交渉を再開する相談をしたところ、作業が動き出して、'02年12月10日、East Bridge社と契約が成立しました。

ハル・ゴールド氏によると、アメリカでは学校や図書館などに納入する本を出すところとそうでない所は区別されているので、前者で出版したいとのことでした。

NYのシェイファーという出版社は、三島由紀夫が本を出した所で、その東洋部門は70%は中国関係のものだそうです。その部門のトーマス・P・フェントン(Thomas P Fenton)氏が独立して仕事を始め、イースト・ブッジ社を作ったのでそこから出版することに決めた、と言われました。

また、そのフェントン氏が編集する *Critical Asian Studies* という雑誌から、'04年3月29日に、C・サラ・ソー(C・Sarah Soh)論文に慰安所の写真一枚使用を申し込まれ、許可しました。韓国系米人のサラ・ソー氏の論文で、慰安婦の個々人の略歴を述べたもので、参考文献に吉田清治・千田夏光などがあつたのが気になりましたが、フェントン氏の手写真があつたので使わせました。

もう一度時間の経過に合わせて話をします。

'00・12・5 国立ドイツTVより写真使用の許可を求めて来ましたが、断りました。

'02・1・5より、父のフィルム整理を始めました。

'02・5・11 ハル・ゴールド氏来福。フィルム整理を手伝ってもらっている福永龍也氏と共に話合いました。

'02・11・7-10 福岡市総合図書館の資料整理をするメンバーと上海・南京調査旅行し、上海の軍医大学の中に日本の十四号兵站病院の主要部分が残り、市庁舎の跡、楊家宅慰安所の跡を見て、南京の中山陵、大屠殺記念館、南京城内を見学しました。記念館の展示に、父の上海の民間慰安所の写真が南京の日本軍慰安所として展示されていたので、案内人に間違いと伝えました。入口の近くには、日本人中・高生の送った千羽鶴と、ごめんなさいの言葉がありました。中国・日本・英語の説明で、三十万人虐殺を述べていますが、南京には当時二十万人の住人しかいませんでした。この設備を作った人の伯父上が親日だったので、保身のために作ったとも言われています。歴史や真実とはほど遠いものです。(※付 日本の学者に伝えましたら、中国は彼らにはビザを出さないのだそうです。)

'06・9・12 アメリカ議会に慰安婦問題が提出されました。その7月頃から韓国系米人のカルフォルニア大C・サラ・ソー氏の大学院生が、代理人として写真使用許可を求めて来ました。交渉している間に8月末に、先方から交渉を打切って来ました。議会提出の期限に間に合わないと思ったのでしょうか。その後C・サラ・ソー氏より、11月に再度写真使用許可を求めて連絡が入り、'93年に岩波書店より出版した論文が送られて来ました。強制連行、性奴隷の説明で書かれていたので、断わりの手紙を出しました。何か米国で韓国系米人の動きがあるので、クマラスワミ報告で関わられていた秦郁彦氏に話を一度して、そのまま忘れていました。

'07・2・27 読売TVたかじんの番組で、関西の高校教師が『上海より上海へ』を強制連行の証拠と言って持ち出すと聞き、使用しないように伝えました。関係者が夜遅くやって来て、相談の末に本や写真をTVに出さぬことで決着。何とも勝手な読み方であり、写真は使用者の意図を強めるために使われるので、野放しにすると危いことを知りました。

'07・3 桜井よしこ理事長が「国家基本問題研究所」を立ちあげられ、私は入会しました。日本の主張を仲間の方々と届けたい思いで一杯でした。政権は民主党に替りました。

'07・7・30 アメリカ議会が慰安婦問題で日本政府非難を議決したと、新聞やTVで大々的に取り上げられました。

'07・12・8 カナダ、欧州連合(EU)のオランダなどの議会で、日本政府非難決議。

アメリカ議会での決議には韓国のロビー活動が功を奏し、日系議員も日本ではなく中国の主張を支持していることを知らされました。また、日本国内で追いつめられたヤクザ集団が海外で人身売買を行い、それが強制連行と結びつき、日本政府非難となったと言われています。

'07・9 『上海より上海へ』の英訳本 *From Shanghai to Shanghai, East Bridge* より出版。その頃小泉首相が国連に行かれていたので、ちょっと五番街を歩いて本屋を覗いて下さらないかな、と思っていました。

'08・5 韓国に「東北アジア歴史財団」が出来て、「ナチスと日本の性奴隷展」を行い、冊子を出版したいのでと写真使用許可を求めて来ました。慰安婦は性奴隷ではないので、お断りしました。又同じ頃、挺身隊協議会という団体からも写真使用許可を求めて来ましたが、慰安婦は挺身隊ではないのでお断りしました。

'08・7・15発行『週刊昭和タイムズ1938』(デアゴスティーニ・ジャパン)に写真と説明の掲載。原稿は左翼の主張を書いたものだったので、事実のみ書くように指導して、二回訂正を行って仕上げられました。(どの人も左翼の主張が浸透しているので、大体二回位訂正して書いています。)

'09・3・18 ソロプチミスト福岡で話。六十年前に売春防止法が出来て、若い人達は娼婦も遊郭も全く知らないで、外国が日本を非難して来ても理解出来ず、性奴隷の説明になびきやすいことを知りました。

この春、最も大きな協力者であったハル・ゴールド氏が亡くなりました。

私の市の図書館へ行くと、最も目につく所に(財)女性のためのアジア平和国民基金編の『「慰安婦」関係文献目録』('97・9・30発行)が置かれています。これに対抗して本当の資料を残すには、ハードカバーで本を作って置くことを薦められました。

私は若い人達に父の資料を手渡して置く必要を感じ、英文も加えて、『慰安婦と医療の係わりについて』(*Relationship between "Comfort Women" and "Medical Treatment"*)を梓書院から2010年4月に出版しました。この時マスコミは「慰安婦問題はもうすんでいる」と全く相手にしないと出版社に聞き、私は日本全国の医学部図書館八十ヶ所に寄贈し、何時か後輩の若者が気付いて下さる日を待とうと思いました。それともう一つ、正しい知識を最も切実に求めている国外の日本大使館の大使宛と、国外の連絡の着く所に贈りました。ハワイ大の林弘子氏、オーストラリア大の右田俊氏をはじめ、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、韓国、中国です。かつて大使館へ千田夏光が本を贈ったと本人が語っていたので、腰の引けた態度を取り続けて欲しくなかったからです。ヨーロッパ大使で国連で慰安婦問題で困られた方から、励ましの手紙を頂きました。

マスコミが慰安婦問題はもうすんでいると言って係わろうとしなかったその傍で、実は

非常に大変なことが進行していました。野党時代、慰安婦に賠償をするという法案を出し続けてきた民主党が政権を取ったので、その法案が成立する可能性が出てきたことを、元民主党員だった方に知らされました。もしこの法案が成立すれば、強制連行された慰安婦が実在するようになり、大変なことになると思い、地域の議員を通して菅首相に届く様に本を贈りましたが、届いたかどうか解りません。また、慰安婦について雑誌に文章を発表していた議員にも本を贈ったのですが、無開封のまま返送されて来ました。

この頃、アメリカのマイケル・サンデル著 *JUSTICE* が翻訳され、日本でも評判となり、日本、米国、中国、韓国などの学生に「慰安婦について」討議をさせるTV番組がありました。この中で日本は過去の慰安婦問題に責任があるという主張でしたが、彼の論の根拠は韓国系米人サラ・ソーとオーストラリア人ヒックスの論文しかなく、その両方とも吉田清治や千田夏光の偽りの話を基に置いているのです。

'12・6・1 私は'07年から取りかかっていた『福岡YMCA一〇〇年の歩み』を発行しました。この作業でいかに日本の歴史が歪められているかを体験し、'12年8月3日、「占領時にアメリカが行った日本に対する言論弾圧について」を『福岡市医報』9月号に掲載するところまで行きました。医師会誌は自由な言論のある所で、後輩の内科医の書かれた論文に助けられ、編集者が採用してくれました。しかし、他誌転載は先方から断られました。

この中で私は教科書墨塗りをさせられた話など、体験を語りましたが、私の近所で手紙の検閲が行われていたので、当地の葦書房の久野氏の出版には関心を持ち、当地の資料のプランゲ文庫についても関心がありました。芸所と言われた博多の演劇資料(武田政子氏資料)があると知って、GHQの弾圧前の演劇資料の保存に協力して来ました。いつかプランゲ資料の研究に役立つことを願っています。

GHQの行ったWGIP・洗脳政策は、日本人を軍部と国民とに分けて、国民は被害者であり、あらゆる困窮と欠乏は軍部の責任であるとし、都市の無差別爆撃も原爆投下も軍部のせいだとして、アメリカは姿を隠しました。軍部と国家を悪く言うことはずっと続き、愛国心のない人達を育ててきました。この様な呪縛から人々を解いて、一日も早く公のために働く人を育てる教育を行うべきです。水と安全を国家に依存しながら、国の力を削ぐ様な行動をする人達とは違う人達を育てることが必要です。

3. 2013年(平成25年)より2017年(平成29年)まで

'13・2・1 亜細亜大・東中野修道氏来訪。父の写真を見て頂く。南京学会の代表。

'13・11・5 『日本軍「慰安婦」問題—すべての疑問に答えます』アクティブミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(wam) 編集、合同出版株式会社発行。

表題も決まっていない段階で、今迄の慰安婦のことを纏める本を作るとして、慰安所の写真二枚の許可を求めて来たので、南京虐殺を見ている兵士の説明の誤りを指摘し、二枚の許可をしました。出来上がると『日本軍「慰安婦」問題』となっていて、慰安所規程('92年に西野瑠美子が無断使用)、慰安婦達(チマ・チョゴリ姿がいる)、婦人科診察台の三枚の写真を無断使用していました。

著作権の確認のため、三枚は無許可との手紙を発行者上野良治宛に送りましたが、宛先不明で返されてきました。

- '13・11 雑誌『歴史通』(隔月刊)の取材を受ける。
- '14・1月 『歴史通』28号に「ナニが性奴隷ですか! 父は慰安婦の赤ヒゲ先生」掲載。
- '13・2 「史実を世界に発信する会」会報に「慰安婦と医療の係わりについて」掲載。
- '14・2 河野談話見直し決定。その後ネットで父の本を捜して、話を聞きに来る若い人達が連絡してこられるようになり、私は喜んでそれらの人々と話をしました。若い人達のエネルギーに圧倒されて、一時ダウンしてしまいました。
- '14・5・8 産経新聞の阿比留氏とお目にかかる。
- '14・6・2 西岡力氏福岡で講演。会場でお目にかかる。
- '14・6・12 チャンネル桜の大高未貴氏、カメラマンと取材に来る。
- '14・8・3 加瀬英明氏、日本会議主催の会で講演。後日戦争に関する本の執筆をお願い。
- '14・8・4-5日、朝日新聞が慰安婦の報道が誤りであったことを認めました。22年振りにやっと本当のことが認められ、一件落着きと思いました。来年が戦後七十周年ということで、秋頃から戦争に関する取材を受け、TNC有住氏、西日本新聞下崎氏と会って話しましたが、記事にはなりませんでした。
- '15・3・2 FBSで引揚婦人保護について放映。尼崎記者。この人に佐世保引揚げについて教えられ、連休に佐世保共済病院長ドクター木寺と医員ドクター松隈夫妻と共に浦頭検疫所跡と資料館、釜基地を訪ねました。
- '15・3・21 佐賀アバンセで引揚について講演し、資料を佐賀の方々に差し上げました。
- '15・4・11 『ザ・リバティ』(大川隆法氏の機関誌)編集者の山本慧氏より、ユネスコ世界記憶遺産に中国が「南京事件」と「慰安婦」の登録申請した件の連絡を受ける。4月18日にカメラマンと共に取材に。
- '15・5・5 幸福実現党党首、釈量子氏来訪。氏はパリのユネスコ事務局を尋ね(5・25-29)、パネブスカ氏に抗議文を提出。その後日本のユネスコ大使佐藤氏と会う。持参された抗議文には43名の賛同者の名を書き、参考資料として『慰安婦と医療の係わりについて』天児・麻生著を一冊添えて出して頂きました。写真があり、英文で説明された資料は役に立つと言われた、と聞きました。
- '15・6・10 日本外国人記者クラブでPM四時半より釈氏、茂木弘道氏(史実を世界に発信する会事務局長)らと共に記者会見をして、ユネスコの世界記憶遺産の「慰安婦」登録に反論書を提出したことを報告しました。その反論書の中に賛同者の名がありますが、日本に長くお住まいの外国の方、日本に帰化されたアジアの人々の名を見て有難く思いました。
- '15・7・26 高橋史朗氏(明星大教授)、会見のビデオを見てお電話くださる。
- '15・9・5 青木実氏(大和魂を育てる会)来訪。
- '15・10・22 六本松の陸軍墓地の清掃について、日本会議の若手の人と護国神社の人が相談される会で、2、30代の人々が19人集まれ、そこでユネスコの世界記憶遺産慰安婦登録反論と郷里に残る戦跡について話し合いました。
- '15・11・1 東京のフジテレビより『慰安婦と医療の係わりについて』を書いた天児に取材したいとTEL。11・1日曜朝の番組と言うので、反論文の「慰安婦について」FAX5枚送る。今迄通りの左翼の様な話をして、後で申し訳の様なTELをしてきました。
- '15・11・5 ユネスコ世界記憶遺産に「南京事件」が登録されたと報道。

'15・11・19 産経の奥平氏より、自民党国際情報検討委員会に出て欲しいと伝えられたので、茂木弘道氏に出席して頂くようお願いしました。11・18RKB高藤氏、11・26読売田代氏来訪。

'15・12・19 原田泰三（国際情報検討委員会会長）議員事務所訪問、青木実氏と大井議員の運転で。

'15・12・26 鬼木誠議員事務所を青木氏の紹介で訪ねました。

'16・3 高橋史朗著『日本を解体する戦争プロパガンダの現在』受贈。

'16・5・25 元毎日記者下川正晴氏、「引揚」の取材に来訪。

'16・8・3 立教大・小野沢あかね氏（遊郭のことを研究）が来訪。祖父の驅梅院資料を見られました。

'16・8・12 台北市「平和と女性人権館」王婷瑩氏より手紙。12月に開館する慰安婦記念館の常設展で慰安所の写真使用を申込み、日本のwamとも'05年より交流があるということでした。日本の現状を述べ、断わりの手紙を出しました。

'16・11・26 RKB西嶋ディレクター、阪大の木下直子氏（慰安婦問題について研究している人）と来訪。西嶋氏は林えいだいの「抗い」という映画の監督で、制作した人です。

'16・12・21 産経奥平氏より、韓国釜山の国立日帝強制動員釜山歴史博物館に父の撮影写真四枚が無断展示されている、と知らせてくださいました。強制連行が強制動員になっています。

'17・2・20 三輪宗弘氏（九大の資料室関係の研究者）より紹介されたと、『歴史通』編集長仙頭氏より写真使用許可を求められ、許可。数日後掲載誌『歴史通』4月号受贈。

約三十年間の写真の使われ方を述べました。'07年から'17年迄は国外から日本を貶める行動が多く起こされて、それを受けて対応してきました。日本を叩く資料として写真は有効なので、多くの人が許可を求めて来ています。河野談話の出される前やアメリカ議会（下院）の日本政府非難決議が出される前に何か動きがあったのに、国のどこにどう伝えたら良いか解らず、時間を無駄に使ったことが、私にとってはとても心残りとなっています。早く行動して、悪い事にならずに止めることが出来たのは、ユネスコの世界記憶遺産登録の場合でした。非公開で行われた審査の資料を八ヶ月かけて集め、教えて下さった方に、政府はどうされているのかと質問した時、政府は平和安全法制の問題と二階氏が二千名余の人を連れて中国訪問をする時なので、個人的にやって欲しいというような意向だと伝えられました。私は三十年前の盗難事件以来、自分の権利を守るためにずっとやって来たのと同じことをやったつもりです。

それが結果的に、日本の名誉を守ることにもなったことは嬉しいことでした。こうしたことは一人ではできません。人々が力を合わせて行動して出来ることだと思います。政治家や政府や行政の機構が全く無関係のこととは思いません。

私は身の回りに起った三十年間のことを、出来る限り正確にお伝えしたつもりです。周囲より仕掛けられる、歴史戦に対応する方策を考えるための一助として頂けたら幸いです。

（17年（平成29年）3月3日、麗澤大学東京研究センターにて）